戎橋

## 鴨なんばんと戎橋筋

大阪はミナミ、「難波」に由来する食べ物に「鴨なんばん」がある。江戸時代、難波村は一面のネギ畑で、そのうまさは評判だった。やがてネギを具材にした料理は「～なんば」と呼ばれ、鴨肉と合せたうどんは「鴨なんば」。それがいつしか「鴨なんばん」に訛って広まったといわれている。

当時、難波村は今宮戎神社と道一本でつながっていた。大坂夏の陣で豊臣氏が滅んだ元和元年（1615年）、町衆たちによって道頓堀川に「戎橋」が架けられると、この道は御利益祈願の人々が行き交う参道に。参詣客を目当てに食べ物屋をはじめさまざまな店が軒を連ね、「戎橋筋」の賑わいが生まれた。

江戸末期から明治初期になると、戎橋の南にあたる道頓堀界隈は、人形浄瑠璃や歌舞伎などの芝居まちとして一層賑わった。芝居茶屋は50軒を超え、多くの芸妓を抱える宗右衛門町は、商家の番頭や手代たちの格好の遊び場となった。

## ミナミの情緒を守ろう

江戸時代、大坂市中は天満組・北組・南組の三郷に分けられ、北組と南組はおおむね本町通りあたりを境としていた。北組には中之島・江戸堀の蔵屋敷に近い堂島新地（後の曾根崎新地）があり、南組には道頓堀の芝居町や島之内の遊里を抱える歓楽街があった。その名残から、梅田界隈の歓楽街を「キタ」、難波界隈を「ミナミ」と呼ぶようになったといわれている。とくにミナミは、旦那衆が接待によく利用した堂島新地や新町（西区）に比べ、庶民的な歓楽街の風情があった。

道頓堀

# ミナミ今昔

しかし、時代が昭和から平成へと移るなか、ミナミの趣きは急変する。道頓堀の芝居小屋は次々と姿を消し、宗右衛門町では芝居茶屋ならぬ風俗店が通りを席巻。平成16（2004）年には悪質な客引きなどもピークに達した。こうした状況に危機感を募らせた地元商店主たちは、警察や行政、各団体とも力を合わせ、ミナミの環境浄化に乗り出した。そして平成17年には改正迷惑防止条例の施行も奏功し、現在、健全な賑わいが取り戻されつつある。

## 伝統とトレンド

ミナミでは今、かつて当地で賑わった文化を再興し、新たな活性化をめざそうという気運が高まっている。例えば地元商店会や企業、行政などで構成する「ミナミまち育てネットワーク（名誉会長:堀井良殷大阪21世紀協会理事長）」では、映画・ジャズ・食をテーマに毎年10～11月に「ミナミ芸術祭」を開催。今年で第5回を迎える。

同祭の目玉企画は「ミナミ映画祭」。日本の映画興業が南地演芸場（現南海難波駅前・丸井百貨店）で始まったことに由来し、ミナミを舞台にした昭和の名作が各所で上映される。また、ジャズは大正時代に上海から入ってミナミで大流行したことから、今年も各所で演奏会を開催。祭期間だけ限定販売されるミナミブランドのビールやワインなども好評で、今年は「ミナミ焼酎」の新登場が注目されている。

ミナミをこよなく愛する人たちによって、ミナミは伝統とトレンドがほどよく調和したまちに変わろうとしている。

宗右衛門町